

未来賞

あまえばつー

相手の花ばかりに
水をあげていると、
自分の花が枯れちゃうよ。

If you water only your opponent's flower,
your flower will die.

胸アツ賞

かおる

目の前の景色は
もう二度と
見られないかも
しれない。

You may never be seen again
the scenery in front of you.

ちらっと見た言葉。
それがあとで響く瞬間が
来るといい

人それぞれ受け取り方が違うので、
その人にとって一番しっくりくる形
で伝わるかと思っています。
何気なく読んだ言葉が人生に影響す
るかもしれません。
高瀬 薫(国際4年)



あなたのオリジナルの
言葉を募集します！

秋学期も新たに募集します。
インターナショナルラウンジ
(8号館)、クララ・ラウンジ
(5号館)のボックスにペンネ
ームで投稿してください。

未来賞

Nagi

自粛はしても、
萎縮はするな。

Even if you have self-restraint,
don't let yourself atrophy.

自分のスローガンを応募。
活動を広げるきっかけになれば嬉しい

友人がこの企画のファンと一緒に
応募。人生が内向きになっている
ようで苦しい日々自分に言い聞
かせていました。各自の活動につ
いて考えるきっかけになるといい
と思っています。
田上 風(英文3年)



未来賞

ひしめくちる
五郎

枯れた花も、
あなたの心の中では
咲いている。

Withered flowers are still bloom in your mind.

未来賞

Nacho
Cheese

自分の夢は、
まず言葉にしてみよう。

First, let's express your dreams in words.



助川哲也(国際学科教授)

紡がれた言葉の力

毎日が虚しい。友に会えず寂しい。先行きが
見えず不安だ。

コロナ禍の学生たちから悶々とした声が届き
だした時、この言葉の企画を提案した。自分が
ひどく孤独だった頃、なにをしていたかを思い
出したのだ。それは、希望を込めた新しい言葉
を紡ぎ、カードに印刷し、誰かにプレゼントす
ることだった。300を超えたそれらの言葉は
今も、ある企業の社員食堂で、ウェルカムカー
ドとして使われている。

言葉は贈り物である。受け取る側だけではな

く、その言葉を紡いだ送り手の心にも、なんら
かの光をもたらす。言葉で表現された新しい概
念は、確たるものとしてそこに生まれるのだから、
実は、作者をこそ立ち上げさせるのだ。

横浜キャンパスの一隅で静かに始まった言葉
のやり取り。ハマる人もいれば、あまり興味が
わかないという人もいるだろう。それが自然だ
と思う。しかし、たかが言葉、されど言葉なの
だ。自身に用いる言葉はもちろん、他者に放っ
た言葉もすべて戻ってきて、それぞれの人生を
形づくっていく。

特集1

励ます気持ちを言葉にのせて ～学生たちが考えてきたこと～

コロナ禍が続く日々、自分の気持ちに向き合い、発信を始めた学生たちと教員がいます。
思いがけず長引くコロナ禍に立ち止まりがちなか中、言葉をツールに踏み出したさまざまな形での一歩。
その歩みが自分を変化させ成長させると同時に、明学生を励ましています。

横キキャン賞

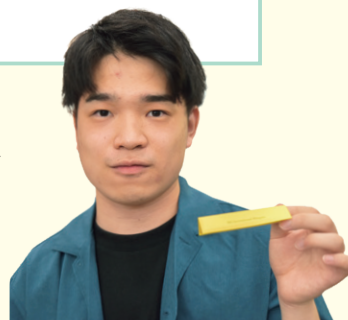
Mike

当たり前の
生活には、
驚くほどの努力が
詰まっている。

The natural life is full of
amazing effort.

なんでもない日の
貴重さとありがたさを実感

医療関係者などの多大な努力のおかげ
で、日常生活が戻ってきつつあること
を日々感謝しており、その気持ちを応
募しました。応募をきっかけに自分の
生活も見直せたように感じています。
矢川大輝(国際3年)



エモい賞

NYANCAT

あなたに会えたのは、
良い偶然でした。

Meeting you was an unexpected but
fortunate encounter for me.



友達に言われて嬉しかった言葉。
多くの人に使ってもらいたい

贈られて以来3年間、大切に思ってい
た言葉。多くの人に知ってもらいたく
て応募しました。
長尾佑梨絵(国際4年)



MG International Whispers

「あなたのオリジナルの言葉、募集！」今年4
月、教職員によるWhispers委員会が「心に響
く言葉」(日英)を募集し、カードにしました。
温かい言葉、面白い言葉、苦悩する友人への言
葉…。6月、30名超の学生から150以上もの
言葉が集まり、授賞式を開催。カードはラウン
ジのテーブルに設置され、持ち帰り可能です。

8号館で授賞式を
行いました！



どの言葉にも、
深くうなずくばかりでした

阿部浩己(国際学部長)

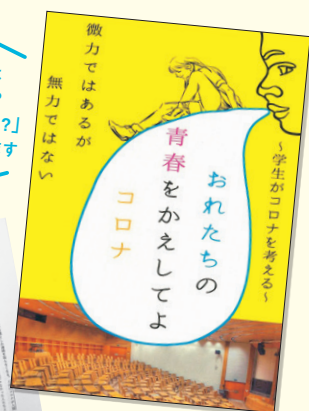
受賞者のみなさん、おめでとうございます。特に、
「横キキャン賞」を受賞した言葉には、当たり前の生
活を送ることの重みと大切さを改めて実感しました。
これからも、思考を巡らし、味わいのある言葉の杜
を作っていくください。

おれたちの青春をかえしてよ コロナ

国際経営
学科

教育理念“Do for Others (他者への貢献)”の実践として、齊藤都美ゼミ生が立ち上げた「ヘボンプロジェクト」。コロナ禍での学生の現状発信と、困窮している学生への支援を目的に書籍を発行しました。1～6章を6名の学生が執筆し、番外編を学生と教員が担当。コロナと向き合っていると感じ、どう行動していきたいのか、学生らしい率直でリアルな言葉がささります。

「今すべきことはこれでもいいのか？
このままでいいのか？」
学生が本音で語ります



memo

発行までには約1年！
執筆・販売準備に時間を費やし、デザインやWebマーケティング戦略にも苦戦。やっと完成した書籍です！



書籍情報：
『おれたちの青春をかえしてよ コロナ』
著者：高橋 憲、高沢友基、高杉和哉、舟木竜之介、川口拓海、岩崎勇磨、江森未来(国際経営4年)、齊藤都美(明治学院大学講師)

電子書籍：オリジナルサイト
(<https://yatagarasuhepuburn.myshopify.com/>)
500円～10,000円
紙書籍：Amazon
(<https://www.amazon.co.jp/>) 1,980円

左から、高沢友基(Yuki)、高橋 憲(Kentee)、岩崎勇磨(Yuma)、舟木竜之介(Ryu)、川口拓海(Tako)、高杉和哉(Alex)。()内は書籍中のペンネーム。

CONTENTS

01 学生はコロナ禍で怒っている

「不要不急の外出」の定義とは？

02 学生が考えるコロナ禍の繋がりや幸せ

03 コロナは人間関係を悪化させた？

04 学生が考えるコロナ禍の恋愛の変化

遠距離恋愛が浮き彫りに!?
気持ちの温度差

05 学生が考えるコロナ禍の価値観の変化

企業が人件費削減する中、
学生はどうやりくりしたか

06 学生が考えるコロナ禍のアルバイト

微力ではあるが無力ではない

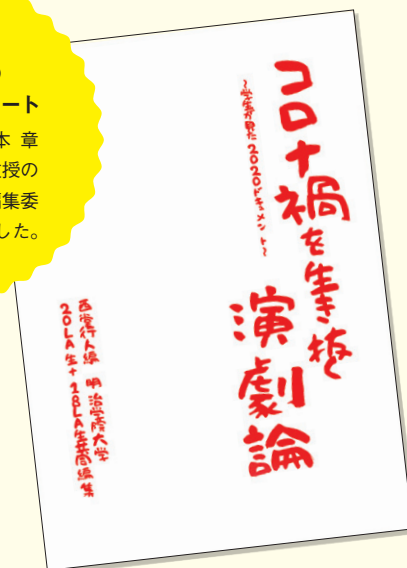
高橋 憲(国際経営4年)

「私の大学生活をかえしてよ」。細い声で電話越しにそう叫ぶ友達に、何もしてあげられなかったことに対するやり場のない罪悪感と、社会に対して抱いた違和感からこのプロジェクトを発起しました。7人の学生と齊藤都美先生で取り組んだプロジェクトについてもっと知りたい、輪を大きく広げられたらいいなと思っています。



memo

学生と教授の対話から制作スタート
学生の座談会、岡本 章元本学教授と西堂教授の対談も収録。学生編集委員10名が関わりました。



表紙・デザイン：
益村梨紗(芸術4年)、
編集協力：石倉和真
(芸術学専攻博士後期3年)

「持たざる演劇」で振り返る



Pick Up 03
グロトフスキの演劇論と今・これから

「私たちは今生活が制限されているため家にいる時間が増えた。これは言い換えれば、自分自身や自分の周りについて考える機会が以前よりも多く与えられているという状態である。今、この状況でグロトフスキの演劇論を用いた作品に出会えば、自分とは何かという問いの答えに近づけるような気がするのだ。」

梅津 光(芸術4年)

対面ならではの迫力・高揚感



Pick Up 02
コロナ禍で再確認した、演劇の変わらぬ本質

「一方、劇場で観劇する際もどこをフォーカスして観るのかは観客の目による演出であることに気づいた。舞台全体を視野に入れながらも、どの席から観るのか、どこをフォーカスして観るのかを自分の目で選別できることが、実際に劇場に足を運んで観劇することの大きな魅力であると気づいた。」

宮澤緒日奈(芸術2年)

待ち望む「当たり前の日々」

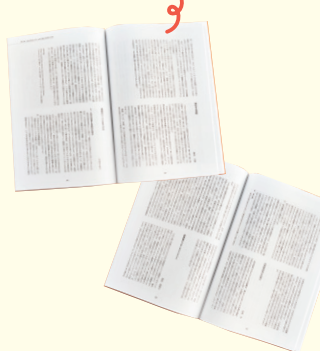


Pick Up 01
大学一年生、コロナ禍

「私は芸術学科で、多くの人の心を突き動かしてきた作品を学ぶこと、そして友人との意見交換を通じて、人や社会、心理を知りたい。つまり、私の求める大学には人との交流が必要不可欠だ。他の大学生も、学科での学びだけでなく、サークル、留学なども大学生活の一部と捉えているのではないだろうか。」

楢 彩那(芸術2年)

34名のレポート・西堂教授の「わたしのオンライン授業記」も掲載。



人と会うこと、観劇のパワーを実感！



「学生が見た2020ドキュメント」から学生の声が聞こえてくる

大学は実験の場であり、学生はキャンパスを自由に使ってほしい



西堂行人(芸術学科教授)

演劇はつねに集団作業である。本をつくるのも同様だ。『コロナ禍を生き抜く演劇論』は3年生ゼミでの危機の時代の演劇論と、オンライン教育で苦しんだ1年生(いずれも当時)の必死さが、ドキュメントをつくる動機づけになった。呼びかけに応じてくれる学生がいなければ、本は成立しない。その結果、各人の思いが重層化したものになったと思う。

今、このときだからこそ、演劇について考えた

本橋沙樹(芸術2年)

コロナ禍での生活や出来事について振り返ったことはありますか？ 私たちはコロナ禍で過ごした1年を振り返り、そのうえで演劇の在り方について考え直しました。「コロナ禍の生活と演劇ってどんな関係があるの？」と思うかもしれませんが、読めばきっと新たな発見があるはずです。この本がコロナ禍を新たな視点で考えるきっかけとなれば幸いです。